

※射撃は、朝霞市、新座市、和光市にまたがる陸上自衛隊朝霞訓練場で開催されます

特集 東京2020大会 ~射撃編~



和光市
イメージキャラクター
「わこうっち」



©musashifront asaka



新座市
イメージキャラクター
「ゴウキリン」

①世界に目を向け、共生社会実現を目指して

新座市 総合政策部 オリンピック・パラリンピック推進室
室長 増田 順子さん、主任 猪鼻 佑己さん、国際交流員 グスタヴォ ラモスさん

新座市は射撃の開催市であり、埼玉県内では唯一のパラリンピック競技の開催地でもあります。選手達は、選手村と競技会場を往復するため、パラリンピック競技開催に向けた大きな改修は予定していませんが、会場近くの公民館などは大会期間中の車いすの観客の利用に備えて、トイレをバリアフリー仕様に改修済みです。パラリンピック競技の開催市として、平成29年度から市内の小学校では、パラリンピアンが学校に来て講義する「あすチャレ！スクール」とスポーツ義足体験ができる「ユニバーサル・ラン(スポーツ義足体験授業)」の受講を進めています。実際に車いすや義足を体験することで、それらを使いこなす難しさや不自由さを実感し、さらに、実際に障害を持った方の体験談を聞くことで、より身近な存在として感じることができているようです。ハンディキャップを克服しアスリートとして活躍している講師の話を聞き、尊敬の念を抱き共生社会への理解を深めることにも繋がっています。パラ競技への興味も芽生え、東京2020大会を観戦したいという声も聞きます。2020年度までに市内の全校が受講する予定で、東京2020大会を契機に、子供達が社会の多様性を考えるきっかけとなることを期待しています。



また、新座市はブラジルオリンピック選手団の事前トレーニングキャンプを受け入れます。ブラジルのホストタウンにも登録しました。市や立教学院新座キャンパスのスポーツ施設を使い、陸上、ボクシング、空手、レスリング、テコンドー、ウェイトリフティング、水泳(マラソンスイミング、水球)の7競技8種目の選手が、事前キャンプを行う予定です。今年度は、陸上、水泳、空手の世界大会前の事前トレーニングキャンプが行われました。そ



事前キャンプ(空手)時の市内の空手小学生と親睦練習会

の競技を行っている小中学生には、世界のトップ選手の姿を目の当たりにし、一緒に練習できたことは得がたい体験でした。各選手団は市内の小学校の子供達とも交流しています。来年の東京2020大会での選手の活躍を楽しみに、「あの時一緒に走った選手を応援したい！」「学校に来てくれたあの選手が活躍するといいな！」など、今から心待ちにしています。

また、ホストタウンとしての交流の一環で、ブラジルで11月に開催された「ブラジリアン・ユーススクールゲームズ」というブラジル全州学生が集まるスポーツ大会に、市内の中学・高校生4名が出場しました。ブラジルの同年代のトップ選手と同じ時間を過ごすことで、言語の壁を越え、多くのことを吸収してきたようです。

今年度は、市の出前講座の一つとして「ブラジルを知ろう」講座を展開しています。小中学校や町内会で、グスタヴォさんが講師となりブラジルの食べ物や文化、人々の様子、ポルトガル語などについて、市民に広く紹介しています。市内の立教大学では、学生、教職員すべてを対象とした全4回の講座を開催し、キャンパスの地



図を使い、ポルトガル語での案内を学んでもらいました。ブラジル選手団がキャンパス内の施設を利用する想像しながら練習したこと、良い事前準備となつたようです。また、グスタヴォさんは市の広報紙で、ブラジルと日本の違いを感じたことを「ガスの部屋」というコーナーに連載しています。市のFacebook

でも「ウィークリー・ガス」として、ブラジルのイベントや祝日の話など、今のブラジルについて発信しています。多くの市民の方に、ブラジルを知り、親しんでもらいたいと思っています。それが世界に目を向けるきっかけとなり、共生社会実現の足掛かりとなることを願っています。

②パラリンピック競技「射撃」を知ろう！

埼玉県身体障害者ライフル射撃連盟 会長 理事長・事務局 西野 均さん

-「射撃」の見どころを教えてください。

射撃は大きく分けて、「ライフル」と「クレー」に分類され、パラリンピック種目はライフル9種、ピストル4種で、「クレー」はありません。構えは立射、膝射、伏射の3姿勢で、ライフルは50m先、エアライフルは10m先の的の中心を狙います。エアライフル標的の10点は10m先でも直径0.5mmしかなく、あまりの小ささに驚かれると思います。障害によって銃を支えて持つことができる「SH1」と銃を支え持つことができない「SH2」に分かれています。さらに、体幹力により3つのクラスに分かれ、それぞれ、車いすの背もたれの高さが変わったり、車いすでなくイスに座って行うなど、装備を変えることで、障害の重さに関わらず、同じ土俵で競技を行うことができます。

10年前から、競技としての射撃は大きく変化しています。以前であれば、観客の私語は禁止で、選手が集中できるよう静かな環境で競技を行っていました。現在は『おもしろい』『わかりやすい』ことが重視され、ファイナルの銅メダル決定あたりから観客が手拍子で会場を盛り上げ、一緒に楽しむようになってきました。また、以前は紙製だったのが電子となり、一発ごとに点数や順位が表示され、観客にもオンタイムで試合の経過がわかり、一緒に手に汗握り観戦できるようになりました。

-国内外のバリアフリーの状況について教えてください。

国内の状況に比べると、海外のほうがバリアフリーは進んでいます。射撃場を見ても、全体的にスペースが広く、フラットで、車いすでのすれ違いもスムーズです。段差のあるところはスロープが設置され、2階建て以上の建物にはエレベーターが設置されています。ただ、段差を全てなくすことは物理的にも難しく、そういう場所にはボランティアスタッフが配置され、車いすを押したり、持ちあげたりとサポートしてもらえる体制が整っていました。埼玉県では、長瀬射撃場にエレベーターがないため、障害者の大会を開催できずにいます。パラリンピック競技開催県として、物理的なバリアフリーと、い



つでもサポートしてもらえる安心感という精神的なバリアフリーが実現され、今後車いす競技の大会がどんどん開催されることを期待しています。

-「東京2020大会」開催に向けて、今後の取り組みなどを教えてください。

水田光夏(みか)選手(埼玉県身体障害者ライフル射撃連盟所属・東京2020大会内定)の応援ツアーの企画を手伝う予定です。より多くの方に選手を応援し、楽しんでもらいたいです。大会の競技ボランティアにも登録しており、何かしらの形でサポートできればと思います。

「射撃」というと、「危険」「怖い」というイメージを持たれる方もいるかと思います。しかし、競技としての「射撃」は厳格なルールの下で行われるスポーツです。己との戦いであり、精神力、集中力が必要な競技です。オリンピック競技の中で陸上、水泳に次いで参加国・地域が多く、世界ではメジャーなスポーツでもあります。日本ではまだまだ馴染みがないですが、この大会をきっかけに、今後もっと多くの方に射撃の面白さを知ってもらいたい、競技人口のすそ野が広がればと思います。県内のオリンピック・パラリンピック関連イベントでも「ビームライフル」体験会などを行っています。1日に約300人の参加があり、皆さんのがんばりを感じています。夏までにぜひ体験していただき、大会と一緒に応援しましょう！

